

12

ボツリヌス治療の原点

—ドイツ人医師J・ケルナーによる190年前の予見—

澤田麻衣子

一橋大学大学院 博士後期課程

今日ボツリヌス治療は、米国人の眼科医スコットによる斜視の治療報告(1980)を皮切りに、神経内科領域を中心に急速に拡大し、遂には美容外科領域において、筋弛緩作用を応用した「皺取り」や「輪郭補正(エラ取り)」の目的で使用される、ボトックスという商品にまで至っている。中でもボトックスの使用は、極めて大きな市場となつて久しい。

ところで、このスコットによる治療報告は、ボツリヌス毒素を治療に応用した端緒として、ボツリヌス治療史上、その意義の大きさが指摘されている。しかし、彼の最初の試みに先駆けること1822年、「治療薬としてのボツリヌス毒素」の可能性を示唆するものがいた。ユスティヌス・ケルナー(Justinus Kerner 1786-1862)というドイツ人の医師である。彼はすでに1817年、今日のボツリヌス中毒に当たる食中毒の症状とその経過を、体系的に記述した報告書を提出している。

このJ・ケルナーという人物は、ドイツ南西部に位置するヴェルテンベルク公国の小都市ヴァインズベルクの市専従医であったが、詩人としても大変高名であった。彼の詩作品にR・シューマンによって作曲された「ケルナー歌曲集」は、今日ドイツの人々にとっても馴染みの歌となっている。ワインにも通暁し、彼の名を冠した「ケルナー」という品種の白ブドウ種もある。しかし、ケルナーの本業はやはり医業であった。晩年の市専従医としてのケルナーは、単なる治療者という立場を越えて、共感的な態度をもって患者に向き合う、人格的に優れた医師として世に広く知れ渡っていたが、チュービンゲン大学の医学部を卒業し、29歳の若き臨床医として活躍し始めたケルナーは、ナポレオン戦争による経済疲弊に伴った食品衛生状況の悪化によって、ヴェルテンベルク公国一体で大量発生していた疫病の病因解明に尽力した医学者としても知られている。この疫病とは、腐敗したソーセージを媒介とする食中毒、今日のボツリヌス中毒を指す。よって、この食中毒の専門家として名を馳せたケルナーのことを、人々は「ソーセージケルナー」(Wurst-Kerner)の愛称で呼んでいた。

さて、ケルナーによる食中毒(すなわち、ボツリヌス中毒)の詳細な症例報告は、1817年と1820年、さらに1822年の3回に渡って提出された。とりわけ1820年の報告書「Neue Beobachtungen über die in Württemberg so häufig vorkommenden tödlichen Vergiftungen durch den Genuß geräucherter Würste」の中で、ケルナーは今日我々がボツリヌス中毒として把握する限りの疾患の症候学を、ほぼ完全な形でまとめている。さらに、1822年の症例報告「Das Fettgift oder Fettsäure und ihre Wirkungen auf den thierischen Organismus. Ein Beitrag zur Untersuchung des in erdorbene Würsten giftig wirkenden Stoffes」の第8章で、彼は食中毒の原因物質——これをケルナーは「ソーセージ毒」と名付けた——を治療に応用できる考えを示唆し、この毒を少量用いることで、「交感神経の過剰活動・過興奮性」や「発汗の亢進、および粘液の異常分泌」を抑制できると考えた。この指摘ゆえ、スコットよりおよそ160年前に提出されたケルナーの症例報告が、「ボツリヌス治療の原点」と見なされうるのである。さらにケルナーは同章の最終節で、「このことはほんの仮説に過ぎず、それは将来の観察によってのみ、立証か否定かされるであろう」と付け加えているが、実際、彼が立てた仮説の内の幾つかが、現在のボツリヌス治療の対象疾患となっていることは、周知の通りである。

以上より本発表では、わが国であまり馴染みのないJ・ケルナーという人物をまず紹介し、そのボツリヌス中毒に関する3つの症例報告に言及することで、彼の医学的な業績に光を当て、再評価することを目指す。また、「ボツリヌス治療の原点」に立つこうしたケルナーの研究を、ボツリヌス治療開発の発展史上に位置付けると同時に、“食中毒の原因物質を治療薬として応用する”，とケルナーが今から190年前に予見したことの意義を、当時の医療事情に即して検討することをも試みる。